
4つの天

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4つの天

【NZコード】

N9284F

【作者名】

福寺なつ

【あらすじ】

「忍岳と鳳穴、花火大会」ギャグです。

(前書き)

これはサイト「Banco」に載せたものです。

「忍岳と鳳穴、花火大会」

+++ 4つの天 + + +

色とりどりの生地が、電車の中で揺れる。

「今日は楽しい花火大会」

今日は楽しい雑祭り、メロディにのせて岳人は、プラットホームに降り立つた。

岳人は、だいだい色に染まった空を満足げに見上げた。

夕暮れは快晴の名残をとどめ、今日の花火大会成功を予感させる。

水の中を赤い、黒い、オレンジの金魚が泳いでいく。
そよぐ水面を見ながら、宍戸は金魚をすくつた。

「あ」

白い紙は破け、金魚が音を立てて落ちた。

宍戸は、すくいあげた4匹の金魚を手に立ち上がった。

(レギュラー部員全員の分を、すくうつもりだつたのにな)

白い綿アメを横目で見ながら、忍足は、たこ焼きを買っていた。

(かつおぶし、ケチつてんなー)

と「己こそケチなチェックを入れながら、彼は岳人のもとへ歩いて行つた。

岳人が白い綿アメと赤いりんご飴のどちらに興味を示すのだろうと思ひながら。

「赤い花火ですねー、宍戸さん」

鳳は、とてものどかな声をあげながら花火を見上げた。

ヒュウウウウー——、と消え入るような音がした。

一瞬の静寂。

ドオオンと花が暗闇に咲く。

ワアアアアアという歓声のあと、パラパラパラと音がする。

灰が落ちてくる音。

花が空に咲いた証だ。

宍戸が持つビニールのなかで、金魚がそよそよと泳ぎまわっていた。

「なんで」

宍戸は硬い声で問いかけた。

鳳は視線を花火から隣の先輩に向けた。

宍戸は金魚を持ったまま、後輩を見上げた。

「なんで花火大会に、俺を誘ったんだ？」

また花火が空に打ち上げられた。

「食い意地張つてんなー」

「侑士こそ、たこやきー！」

右手に、たこやきを持ちながら忍足は岳人をからかった。

当の岳人は忍足の予想通り、りんご飴を片手に笑っている。

「そんなん言うたかて。

俺の顔見て、自分ら一言田には”たこやき”一言田には”食い倒れ人形”言つやん”

たこやきを持つたまま器用に肩をすくめてみせる忍足から、岳人はトレイのつまようじを取る。

慣れた手つきで、岳人はたこやきを口に頬ばるとモグモグと食べた。

「ひとつくち」と言つて、忍足は岳人のりんご飴を、かじった。

ドオオーン、ドーンと、まるで急ぐかのように花火が次々に打ち上げられる。

「誘つちゃいけなかつたですか？」

「いけなくはない、と宍戸は鳳に思つた。

「宍戸さんは、断らないでしょ？」

「そう呟く鳳の声が、宍戸の耳に届いた。

こんなにも、騒がしくたて続けに空に花が咲いているのに。

聞こえなかつた振りを宍戸はしなかつたし、鳳は微笑んでいた。

「今、口の中、熱い」

岳人は早口で囁いた。

「たこやき食べたからやろ。

俺は、今、口の中、甘いよ」

忍足は去年と同じ台詞だなと思ひながら言つた。

「赤い、の間違いじやねえの？」

「見てみる？」

「見せてみそ」

去年は、かき氷だつた。
いちごとブルーハワイ。

ベロを見せたのは、どつちが先だつたのか。
そのままキスをしたのは。

「あー、甘い……」

忍足は去年と同じ甘さを思い出した。
砂糖の味、舌の味。

岳人は下を向いて、

「侑士のはツ！タコの味だつた！！」

と言つたので、忍足は思わず笑つて、

「嘘やろ、チユウで蛸の味なんか分かるわけないやん」と冷静に言い返した。

「侑士のタ」「！」

「赤い舌して、よう言つわ、ほら」

忍足は上を指す。

「また赤の花火や」

宍戸は鳳に花火大会に誘われた時、断るつもりは全くなかつた。

「お前、屋台冷やかしてねーのか」

赤い花火があがる。

団扇だけ持つてゐる鳳に宍戸は何の氣なしに聞いた。

「俺、屋台より宍戸さんを見ていたいんです」

次は黄色の花火。

「花火大会だろ」

鳳は花火を見上げていて、宍戸に花火に照らされた横顔を見せてゐる。

屋台は見てなくとも花火は見てるじゃねえかと宍戸は内心、思う。

「花火なんて口実に決まつてゐるじゃないですか」

花火を、一つとりと見上げながら鳳は、はつきりと告げた。

「宍戸さんは、どうして來たんです？花火、見るため？その、金魚をすくうため？」

次々と花火があがる。

「俺は…、楽しそうだから…」

花火があがる音の合間に、彼等は確認し合つ。

「俺は宍戸さんとだから來たんですよ」

お互ひの気持ちを。

「嫌いな奴とは、来ねーよ」

素直じやないと花火がいつてゐるような氣がすると宍戸は思つた。
幻聴だ、花火が喋れるわけがない。

すぐに自嘲するも、宍戸はふと思つ。

パアアアツと咲いて、すうすうと消える花火にまぎれて、好きだと言つてみたくなるのだと。

そういうのでいいのならば、と宍戸は金魚の袋を握り締めながら思う。

だけど一度、言つてしまえば、それは水に浸されて破れやすくなつた金魚をすくう紙と同じなのではないかと宍戸は思うのだ。破れてしまつた紙で金魚はすぐえないように、言つてしまえばそれは敗れるに等しいのではないかもしれないけれど。

なにかが破れてしまうような気がするのだ。

宍戸の気持ちが、ふたりの関係が。

まるで花火が消えてしまうように鳳が消えるのは嫌だと宍戸は思つた。

最後の花火があがつた。

「宍戸さん、帰りましょうか

「そうだな」

人の流れに沿つて、ふたりは歩いていく。仲の良い先輩と後輩。ダブルスを組んで、試合が終わつて、学年が違つて、花火大会には来て。

駅へ向かうには公園を突つ切るのが早い。

公園は街頭の周囲以外は暗くて、あ、と宍戸が思つた時には暗がりだからまるで構わないとでもいうような口付けを受けていた。鳳は自分の横を歩いていたはずなのに何が起こつたのだろうと、いぶかしんでいたせいで、

「怒らないんですか？」

と聞かれた宍戸は、鳳が自分の前に立ち塞がつているのに、よひやく気づいた。

長身を見上げると彼の暗がりの中で光る目の後ろには、さっきまで花火が色とりどりに綺麗だったのに今は真っ暗で星だけがまばゆい光を放っていたのだった。

鳳は怒ったように、じつと六戸を見つめている。

彼らの横を花火大会帰りの人々が通り過ぎていく。

六戸は、すくつたばかりの金魚がはいつたビニールを、ぎゅっと握り締めた。

それを見て、鳳は笑う。

六戸を更に暗がりに、公園の端のほうへ連れて行って抱きしめる。

「手が、ふさがってるから、ふりほどけないでしきう」と金魚をダシにして鳳は、六戸の髪に鼻先をつづめる。

「金魚、はなします？」

鳳がそう言つても六戸は黙つて首を横に振る。

彼の体をふりほどかない。

花火大会を断らない。

それは、夏が終わっても花火が終わっても、きっと変わらない。

六戸はそんな予感をまだ告げられずに居た。

終わり。

(後書き)

2006年07月18日 22:58:45に「鳳穴&忍岳それぞ
れの花火大会！」
というリクエストを頂ました。
有難う御座いました。

(あとがき)

これは20行くらい書いたところで、ちょうどパソコンが壊れました思い出の話です。切ない。

なんとなくリクエスト内容的に、ワイワイガヤガヤしたのを書いた
らしいのかなと思いまして、

3つ目のリクエストを散々ギャグで通したので今回は珍しく、しつ
とりと仕上げてみました。

でもあんまり書き込んでないですね。

描写が甘々です。

それ以上に、今回は終わり方が、ちょっとエゲつないというか、ス
ッキリしないのですが、

この話は宍戸が金魚入った袋を握り締めるところで終わりです。

3日くらいかけて続きを考えてみたんですが、どう考へてもこの先
は鳳が不埒な行為に及ぼうとして、

宍戸が金魚の入った袋を鳳にビシャアアアとかける場面にしか繋が
らず、金魚が可哀相だわ、

花火と関係ないわ、というわけでこの話は宍戸が金魚入った袋を握
り締めるところで終わりです。

あ！何も金魚入りの水を鳳にかけなくても、宍戸が拳で反撃すれば
良かつただけなのかな。

……そんな花火大会でいいのか。

忍岳は、食い氣で乗り切りました。

次のリクエスト小説は樺跡の夏休みです。次で5つ目。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284f/>

4つの天

2010年10月10日20時25分発行